

氏 名 (本 籍) さ と う ひ ろ と し
佐 藤 博 俊

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 記 番 号 医 第 9 8 8 号

学 位 授 与 年 月 日 昭 和 5 2 年 2 月 2 3 日

学 位 授 与 の 要 件 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当

最 終 学 歴 昭 和 4 4 年 3 月

東 北 大 学 医 学 部 医 学 科 卒 業

学 位 論 文 題 目 気 管 支 鏡 下 粘 膜 生 検 に よ る 肺 癌 の 組 織 発 生 に 関 す る
病 理 組 織 学 的 研 究

(主 査)

論 文 審 査 委 員 教 授 仲 田 祐 教 授 笹 野 伸 昭

教 授 佐 藤 春 郎

論 文 内 容 要 旨

肺癌の組織発生過程の解明を目的とし、肺癌100例及び非肺癌30例の計130例の臨床症例より、ブロンコ・ファイバースコープによる区域気管支入口部の粘膜生検標本を計1188個採取し、基底細胞増生を伴う線毛円柱上皮、各種扁平上皮化生及び上皮内癌等の気道粘膜上皮所見について病理組織学的検討を行った。また、喫煙習慣や加齢の影響について詳細に検討し、肺癌10例については7ヶ月後に再生検を行って粘膜上皮の消長についても検討し、次の如き結論を得た。

1) 肺癌は気道粘膜の線毛円柱上皮にみられる基底細胞増生から発生した高度異型扁平上皮化生を母地とし、上皮内癌を経て浸潤癌へと進展する組織発生過程を辿る。

2) この発生過程は肺門部肺癌の大部分を占める角化扁平上皮癌と小細胞癌の双方に深い関連がある。

3) この発生過程は喫煙習慣によって強く惹起され、高度異型扁平上皮化生まで進行して非可逆的性格を有するものとなり、高度異型扁平上皮化生を母地として喫煙習慣と無関係に上皮内癌が発生する。

4) 喫煙習慣に関してはその有無が重要な因子であり、開始年令や喫煙量あるいは禁煙は肺癌発生過程に無関係である。

5) 実地臨床に当って、高度異型扁平上皮化生の存在が知られた症例の長期追跡によって肺癌の早期発見を企画することが重要である。

審 査 結 果 の 要 旨

肺癌の組織発生過程の解明は、新しい肺癌早期診断法の開発の為にきわめて重要な課題である。

肺は組織標本の採取が困難な臓器であり、従来の本研究の材料は剖検肺や切除肺に限られていたため、みるべき成果が得られなかった。本研究を遂行するためには、臨床例に於ける肺癌例及び非肺癌例双方に認められる粘膜上皮所見の検索が不可欠であり、また、他疾患で切除した肺あるいは剖検肺に於いて偶然発見された微小浸潤癌例についての検討を加え、更に、癌発生以前に気道粘膜に認められた肺癌発生母地と想定される粘膜上皮所見を長期間観察してその消長を見極めることが必須の条件である。

著者はこの点に着目し、ブロンコ・ファイバースコープによる粘膜生検という新しい方法によって、肺癌100例及び非肺癌30例の臨床例から合計1188個の気道粘膜標本を採取し、これを材料として詳細な病理組織学的検討を行った。

また、本研究に先立って原発性肺癌100例の切除肺の区域及び亜区域気管支の検索によって発見した1例の微小浸潤癌に於いて、気道粘膜上皮の病理組織学的検討結果を加え、更に、肺癌10例の臨床例に於いては7ヶ月後に再生検を行って粘膜上皮の消長についても検討した。

その結果、肺癌は気道粘膜にみられる基底細胞増生を伴った線毛円柱上皮から発生した高度異型扁平上皮化生を母地として上皮内癌が発生し、浸潤癌へと進展する組織発生過程を辿ることを明らかにした。この発生過程は肺門部肺癌の大部分を占める扁平上皮癌と小細胞癌の双方に深い関連を有し、喫煙習慣によって強く惹起されることも知られた。また興味深い事に、喫煙習慣は高度異型扁平上皮化生が発生するまで強い影響があり、高度異型扁平上皮化生からは禁煙下でも上皮内癌が発生することが知られた。

著者は実地臨床に当って、高度異型扁平上皮化生の存在が知られた症例の長期追跡によって肺癌の早期発見を企画すべきことを強調しており、本研究の成果を喀痰細胞診による肺門部肺癌を対象とした集団検診に応用することが可能である。

本研究は、肺癌の組織発生過程を解明し、この発生過程の誘因として喫煙習慣を明らかにし、更に、肺門部肺癌の早期診断法の開発を可能にしたものであり、学位授与に値するものと認める。